



ファンキー・パラダイス

---

鮎川美糸

---

ayukawabeat

---

見える景色は山だけ。目に沁みるような力強い緑、緑、緑。そこにあるのは静寂の中にある厳しい生活だけ。だけ、なのだが私にとってそこは居心地の良い異世界だった。

心身疲れてオーバーヒートしそうになると、邪念や煩悩を断ち切れるならその世界に染まりたいと思う。未熟な私はずっとこちらに居座ることになりそうだが・・・。

ラフカディオ・ハーンは横浜の外国人居留地から初めて日本の町へ繰り出した時、いくつもの寺を巡った。そのことを著書「神々の国の首都」に書かれている。事細かに丁寧に美しく。碧眼の彼をも惹きつけた寺。

私が密かに心の拠り所になっているのもそこだ。山の中にそっと佇むとある寺である。

高校へ入学してすぐの頃、クラスの親睦を深めるレクリエーション(?)と精神の鍛練を兼ねて、とある山寺へ三泊四日の座禅研修へ行った。会社の新入社員研修でも利用されているそうだが、社会人でも音を上げて途中で逃げ帰る人がいるという厳しいものである。我校の伝統行事として何十年と続いているが、逃げ帰った者はいない。そのことは先生方の誇りであった。しかし、財布などの貴重品は回収して保管されたので、一日に数本しかないバスにも乗車できず、今のように携帯電話もないので迎えを呼ぼうにも連絡手段はない。徒歩で山越えするにはかなりの体力と根気や度胸を要し、陸の孤島に置き去りにされたようなものなのだ。忍耐強いというより、あきらめの境地に立たされていたのである。辛いばかりで早く帰りたかったと皆は口をそろえて言い、中には泣く者もいた。だが私は一般的な感覚とずれているのかさほど辛さも感じずそれなりにエンジョイしていた。

昼前に寺へ到着する。座禅研修の幕開けだ。持参の弁当を食べ、我々は十代の子供らしくキャアキャアとはしゃいでいた。何もないけれど出会ったばかりの同年代の仲間と日常を離れた場にいることが新鮮で訳もなく楽しかったのだ。ちょっとしたバケーション気分だった。その数時間後に真逆の恐ろしい時間が待ち受けているとは知らずに。

午後に本堂で住職と修行中の若い僧侶三名を紹介された。

「分からないことがあれば、普段お寺の事をしている若い者に聞いてくださいね」

と住職は笑顔でおっしゃり、和やかなムードである。座禅も座っているだけなのでそう辛いものでもなかろうと思えてきて、皆の緊張感も緩んできたように感じた。

しかし、甘かった。いざ座禅を始めてみるとそうでもない。座る姿勢は結跏趺坐(座布団を二つ折りにしたものに腰を下ろし、膝につける程度に浅く足を組む)。どうしても無理ならば正座で。手は法界定印(右掌を上に向けてその上に左も重ね、両方の親指先端をかすかに合わせる)を組む。あごを引いて、口を閉じ、背筋を伸ばす。呼吸は鼻からゆっくり吐いて吸う。いろいろと制約があり、ゆっくり座ってポーっとしていれば良いというわけでもない。黙想や瞑想でもなく、自我を排除し無になる、そして自我自体の認識へ立ち戻るといった精神性を持つそう。

始めは20分の座禅から始める。これくらい、なんのことはないと思って始めるも早々にゆらゆらと動いて警策（修行中の者を打つための棒）で打たれる者がいた。

普段は洋式の生活をしていて床に座り慣れていないのだろうと気の毒に思った。私は和室で生活していて慣れているので余裕すら感じる。そこまではよかった。打たれた者は「いた〜っ」と肩をさすっているのではないか。私はうろたえた。警策の棒は樫や栗の木で出来ているが、持ち手は円錐で先のほうは平べったくなっている。テレビで座禅のシーンをたまに見るが打たれても痛そうにしている人をそれまで見たことがなかったので、注意を喚起するための道具でコントなどに使うハリセンのように音は大きいが人体にはダメージを与えないものだと思っていた。それにお坊さんがそんな暴力的なことをされるとは思えなかったのだ。私は動揺したが、揺れれば直堂（監督者の僧）がやって来るので必死に不動で耐えた。ええ、耐えましたとも！

しかし必死の努力も空しく終わりに近づいた頃に、

「精神修行のために順に警策して行きます」

と言われ、へなへなと力が抜けそうになった。怖いから我慢していたのに何なんだ！だがここでへなちょこになっては警策で打たれる回数が増えてしまうので耐えた。そしてその後、打たれた。痛かった。

夕食は業者の作ったものだったが、食事の作法もお寺流である。姿勢を正しく、咀嚼などの音は立てない、お茶や食べ物は残さずいただく。最後は茶碗にお茶を入れて飲み、香の物で拭いていただく。ごくごく当たり前の作法だが、時代の流れのせいか、音をたてぬよう目を白黒させ必死になる者、食べ残そうとする者、食べた後の茶碗に茶を入れて飲むのが気持ち悪くて嫌だという者が続出した。

その時は食事は楽しく食べたいので堅苦しいのはしんどいと感じたが、今思うと嘆かわしい限りだ。元来食事は神事とされ、八百万の神に感謝し、かつ丁寧にいただいたそうだと。そこへ立ち戻れとは言わないが、その心は片隅にでも置いておかねばと思う。

その後、夜の座禅までの間は自由時間だ。暇を持て余した我々は、ふとうら若き僧侶に目を付けた。三人おられるうちの二名は三十前後でむさ苦しい。残る一名は二十代前半で端正な顔立ちをしていた。普段なら道端ですれ違っても、ああ若いお坊さんだなと思うくらいであろう。しかしお寺という非日常の狭い世界でテンションが上がっていたためより一層彼は輝いて見え、我々を興奮させた。笑顔が素敵でチャーミングな人柄なので「チャーミー」というあだ名を早速付け、追っかけをしようということになった。追っかけ、とはよくアイドルのファンが待ち伏せをしたり、追いかけて行ったりしているあの行為である。

「坊さ〜ん」

「チャーミー！」

などと呼びかけながらお寺の中をウロウロと大人数で歩き回り、無遠慮に部屋中の戸をガラガ

ラと開けてゆく。ある戸を開けた瞬間、

「キャー！！」

という黄色い声上がる。後方にいた我々はお目当てのチャーミーがいるのだと思い喜んで

「チャーミー！！」

と叫んだ。

しかし前方の者は逃げてゆく。怪訝に思い見に行くと、そこは脱衣所でむさ苦しい僧がパンツ一丁で作務衣を握りしめたまんま呆然と立ちつくしていた。

風呂上りに作務衣を着ようとしたら女子の団体に闖入され、叫ばれるというあまりにもシュールな出来事に出くわしたのだ。混乱状態に陥っても無理はないだろう。我々も前の者に続いて黄色い叫び声を上げながら逃げ、後ろに続くものも同様に叫んでは逃げる。多数いたためそれが数回繰り返され、逃走中に勢い余って障子に突入して破損させた者もいた。

僧侶はたまりかねて学校側へ苦情を申し出た。そして急遽お堂に集められ先生方からこっぴりとしぼられたのは言うまでもないだろう。静かにふけゆく山の夜に怒声がこだましていた。

朝食はお粥、味噌汁、香の物、お茶。水分オンパレードであるが残してはならない。また泣き言を言う者が続出した。罰ゲームのような朝食を終え、後片付けをしていると台所で麗しきチャーミーを見つけた。昨日の事件があったので我々を避ける、距離を置くなどするだろうかと思構えたが、昨日と変わらず素敵な笑顔で接してくれる。修行を積んでいる方は何事にも動じず立派だと感心した。一人がそれとなく昨日は何をしていたのかと尋ねると、住職と檀家へ行っていたのだと言う。先輩方はのんびりと過ごし、一番若い彼がお供について出ていたのだ。いくら探してもいないはずだ！

知らぬが仏とは正にこのことだよなあ実感した我々であった。

寺の生活に皆は不満しかないようだったが、私は座禅の張り詰めた緊張感の中の静寂と無になった後の清々しさが好きになってきた。低予算のためか食事は不評だったが、始末屋の母が作るうちのご飯よりは美味しい。ご本尊のある本堂で寝泊まりできるのは貴重な経験だし、おっかないと感じていた寺の入り口の仁王様や便所の烏枢沙摩明王も見慣れれば心が落ち着く。それに「おっかけ事件」ほどではないが、毎日何やかやと面白い出来事が起こる。

汲み取り式の便所に自分の靴を落としてしまったため僧侶の下駄を借りて過ごす者。座禅中に緊張しすぎて腸が活発に動いてしまい放屁や腹の虫の音をしんとしたお堂で響かせ笑いを誘う者。便所へ行く時には印を結ばなければならないが、朝食で水分を多量摂取して尿意が限界に達してドタバタと駆け込もうとした矢先に僧侶に捕まり叱られかけるも、

「非常事態です！！」

と強行突破する者。

墓地を散歩している時に年配の担任教諭と同名の墓石を見つけ、ふざけて

「〇〇先生、ご愁傷様です」

「〇〇先生～！」

と泣き真似をしていたところを本人に目撃されてしまい、

「縁起でもない！神聖な場所でふざけてはならん！！」

と大目玉を食らい正座させられた者。

持ってきてはいけない化粧品やウォークマンを持参していて先生に見つかりそうになり、パンツの中へ隠してそのまま半日以上過ごす者。（勝新太郎か！）。僧侶たちの下駄を隠して反応を見ようとするが先に笑ってしまいばれて叱られる者、などなど。

なかなかファンキーで楽しい生活である。研修が終わり、寺を後にする時は寂しさすらあった。

しかし自宅に戻ると、すぐにシャワーを浴び、牛乳を飲んでプハー。お菓子をむしゃむしゃと食べて、

「はあ～生き返った～」

瞬時に俗世へ戻ったのであった。

～ あとがき ～

青春といえば、甘酸っぱいような、爽やかな、胸が熱くなるような気持ちを連想しがちですが、私の場合は下らないことで爆笑、友達たちとわちゃわちゃしたりと、お間抜けエピソード満載な日々でした。一人で自分の世界にいることも多い子供でしたが、ワイワイと過ごしたことが印象に残っております。

今思うと学校というものは同年の者が集結した場で、色々な人間がいて、それぞれに個性溢れるフルーツバスケットのようだったと思います。そのフルーツバスケットの中で私は一緒に笑いながらも面白いことや気になることは心のポケットにこっそり仕舞い込みコレクションしていました。そのころから私は変わり者だったようです。

そして人生の折り返し地点にきて、今までを振り返ることが多くなり、時々コレクションも広げてみるようになりました。バカバカしいけど笑ってしまうことがなんと多いことでしょう。だけどあのときはあの時なりに精いっぱい笑って泣いて生きていました・・・。

そんな天晴なおバカちゃんたちに花束を！

## ファンキー・パラダイス

<http://p.booklog.jp/book/73483>

著者：鮎川美糸

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ayukawabeat/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73483>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73483>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ